

# 『源氏物語』「もろともに」考

——紫の上への一対願望を中心に——

安 永 美 保

【要旨】 本論は『源氏物語』の「もろともに」に注目し、源氏の紫の上との一対願望を考察するキーワードとして論じたものである。

源氏の紫の上に向けた「もろともに」の中には、表面的な「共に・一緒に」といった意味だけでは説明できない源氏の心情を読み取ることができる。多数の恋人を持っていた源氏にとつて特定の人物との一対性を考えることは困難に思えるが、源氏の「もろともに」の用例は紫の上集中しており、源氏にとつての紫の上は唯一無二の存在であったと言える。

源氏は紫の上に「もろともに」を出会い・女三の宮降嫁・死といった二人の関係における三つの節目に使用しており、一見は二人の心が一つであることの指標であるかに思える。しかし、

実際は「もろともに」が使用されるタイミングは源氏の心理的な空虚さによって左右され、「もろともに」という表現をそのままの意味で解釈することは危険である。

むしろ、源氏が紫の上に対して「もろともに」を使用しない時期に二人の心理的な一対性はあった。源氏は女三の宮を要因とした心理的空虚感から改めて紫の上との一対性を願うが、反対に紫の上側の女三の宮への心理的葛藤を露呈し、二人の関係に生じた不具合を確認する結果となった。この否定された「もろともに」は紫の上の死後にまで影響を及ぼし、残された源氏は「もろともに」を事実の歪曲の手段として使用し、最終的に幻巻の「もろともに」歌からみてとれるように、源氏は紫の上との虚構の一対を構築している。

『源氏物語』中の「もろともに」は、源氏と紫の上の複雑な人間関係を知る手がかりなのである。

### はじめに

「もろともに」という表現は、和歌・隨筆・物語等にはしばしば用いられている。そういった作品の中で「もろともに」は、「共に・一緒に」といった意味で解釈されており、さほど難解な表現ではないように思われている。しかし和歌や『蜻蛉日記』の研究によって、「もろともに」は単なる「共に・一緒に」では説明できない、重要性があることが明らかになってきた。その一方で物語中に用いられている「もろともに」については、未だほとんど検証されていない。

そこで本稿では『源氏物語』で用いられている「もろともに」について、人物特に紫の上に注目して検証することで、会話や歌だけでは知りえない登場人物達の心理状況について考察を試みた。

### 一、「もろともに」の研究史

歌語としての「もろともに」については、『歌ことば歌枕大

辞典』の中で次のように説明されている。

一緒にそろつての意。平安時代以後よく見られる。また「もろかづら」から導かれもする。恋や哀傷の歌として、別れやともにいることを詠むことが多い。

右にあげた『歌ことば歌枕大辞典』には、次の二つの歌が引用されている。

①もろともに鳴きてとどめよきりぎりす秋の別れはをしくや  
はあらぬ  
(古今集・離別・三八五・兼茂)

②もろともにたたましものを陸奥の衣の関をよそに聞くかな  
(詞花集・別・一七三・和泉式部)

「もろともに」が歌に詠みこまれる場合、①の歌のように動植物や月等の自然に対して自らとの一体感を求める傾向をもつ歌と、②のように過去にあった一体感が喪失したことを反実仮想的に嘆く傾向をもつ歌が多い。①の歌は兼茂が晩秋に筑紫に旅立つ藤原後蔭との離別を詠んだものであり、秋の終わりを嘆くように鳴くキリギリスに兼茂が一体感を求めることによって、後蔭との別れの哀しみを詠むことに成功している。②の歌は和泉式部がかつての夫が都を離れることを聞いて、共に下ることもない我が身を詠んだ歌である。

②の歌の場合はいうまでもないが、①の歌のような傾向を持つ場合でも、「もろともに」という表現のもつ一体感や連帯感に裏打ちされた状況の喪失による哀しみが主題となっていることが多い。これについては、吉海直人氏も「百人一首」行尊歌「もろともに」考」の中で、「もろともに」歌のもつ傾向として「親しい人と死別・離別した（生き残った）者の哀傷的な要素が多分に含まれている」ことを指摘しておられる。

「もろともに」という表現は、女流日記文学における研究<sup>3</sup>が進んでいる。特に『蜻蛉日記』の「もろともに」については、鈴木裕子氏や宮崎莊平氏の御論に詳しい。鈴木氏は上巻跋文の「思ふやうにもあらぬ身」から作者の「思ふやう」とは兼家との夫婦関係であり、「もろともに」という語はそれを象徴するとともに、作者の理想とする日常と兼家のそれが異なるということを露呈していると指摘しておられる。また宮崎氏は、「もろともに」が『蜻蛉日記』の持つ「悲哀の表出とその形象化」という性格を読み解く上で重要なキーワードであると指摘しておられる。

『蜻蛉日記』の中に「もろともに」という表現は二十五例（「もろとも」四例を含む）存在し、上巻に九例・中巻に八例・

『源氏物語』「もろともに」考

下巻に八例分布しており、一見すると各巻に均一に使用されているかに見える。しかし、「もろともに」が対象とする人物は作者と父・作者と母・作者と子・子と夫などの例も見られる一方で、用例のほとんどが作者と夫（兼家）を指す場合が多い。この作者と夫を対象とする「もろともに」に限って用例の分布を見ると、上巻に集中していることがわかる。これについて宮崎氏は次のように述べておられる。

このことは、上巻に比して中・下巻では作者が兼家と「もろともに」何々するというような事実・事象そのものが激減してしまう実態の、ありのままなる反映にすぎないかにみえそうであるが、ことは単にそれだけのことにとどまるものではない。作者道綱母の兼家に対して抱く親密感・一体感の推移と変容、その喪失の悲嘆、そうしたことを反映しての作品の内面の構造的差異のあらわれにつながってくる。

宮崎氏は上巻に集中する「もろともに」は作者と兼家との親密感や連帯感の表れであり、それに対する中巻の「もろともに」の反実仮想での利用を喪失感の表れとされている。また鈴木氏は「もろともに」が多用されている上巻後半部では、作者

が「過去を生き直す」ことで作者の日常——兼家と真に「もろともに」あること——は兼家の非日常であることに気づいたと述べておられる。

こういつた宮崎氏や鈴木氏の御論によって、『蜻蛉日記』の「もろともに」は作者の主眼が幸福な状況を記録することにはなく、それが失われた喪失感を嘆くことにあること、さらには作者の理想とは如何なるものであったかを解釈する際の重要なヒントであることが明らかになった。

「もろともに」という表現は重要な歌語であると同時に、歌以外で用いられる「もろともに」も重要であることが『蜻蛉日記』等の日記の研究によって明らかになったわけである。一方で『源氏物語』や『宇津保物語』等の物語でも、和歌や手紙に限らず会話文や地の文等で広く用いられている。「もろともに」という表現が一体感や連帯感と表裏一体に喪失感をあわせ持つ表現であることが、歌だけでなく散文中でも見られることが浮上した今、物語においても登場人物に即した一連の使用法に注目することは有用であろう。

## 二、用例調査

『源氏物語』中に「もろともに」は四十九例あり、桐壺巻から竹河巻までは三十八例、宇治十帖では十一例である。また、その分布も会話文（15例）・地の文（30例）・歌（3例）・手紙（1例）等広く使用されている。従来、これらの「もろともに」の解釈は一体感のイメージにのみ引張り張られて、表面的な「共に・一緒に」に留まっており、一体感の裏にある喪失感については見過ごされてきた。これでは作者の伏線ともいえる「もろともに」の真意を誤読している可能性がある。

物語中の「もろともに」を論ずる上で、次のような問題点が浮上する。「もろともに」は会話文では主に男性から女性に使用される傾向がある。これは女流日記の場合は問題になることはないが、物語の登場人物の場合は解釈が複雑になる。つまり会話文中での「もろともに」は、一方からの一対願望を露呈するのみで、他方の意思までを反映している表現ではないということである。

これは『源氏物語』にもあてはまる。「もろともに」が使用される会話文の全十五例のうち、源氏が話し手となる会話文が

十例を占め、残りの五例は源氏とは関係のない用例である。したがって、源氏自身が「もろともに」を使って誰かから表されることは一度もなく、従来「共に」とのみ解釈してきた二者の対性は極めて源氏本位の表現であり、源氏の対願望を反映する表現である可能性が高い。

さらに地の文においても、両者の心情を均等に描写している保証はない。物語中の「もろともに」から登場人物の心理状況を探る場合は、日記文学に比べて「もろともである状況の見せかけ」や「作者の意図」に注意を払う必要がある。

では、実際に『源氏物語』中の地の文について考えてみる。源氏が地の文中で女性と「もろともに」で表わされる事は、紫の上と明石の女御をのぞくと次にあげた夕顔と玉鬘の二例のみである。

I 白袴の衣うつ砧の音も、かすかに、こなたかなた聞きわたされ、空とぶ雁の声とり集めて忍びがたきこと多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開けて、もろともに見出だしたまふ。ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露はなほかかる所も同じごときらめきたり。

(新編日本古典文学全集・夕顔・一・一五六)

『源氏物語』「もろともに」考

II 五六日の夕月夜はとく入りて、すこし雲隠るるけしき、萩の音もやうやうあはれなるほどになりにけり。御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。かかるたぐひあらむやとうち嘆きがちにて夜ふかしたまふも、人の咎めたてまつらむことを思せば、渡りたまひなむとて、御前の篝火のすこし消え方なるを、御供なる右近大夫を召して、点しつけさせたまふ。

(篝火・三・二五八)

I は源氏と夕顔が一緒に庭を眺めている場面である。「見出だしたまふ」と尊敬語が使用されているので、主体は源氏であることがわかる。源氏にとって「砧の音」や「雁の声」等の市井の様子は馴染のないものだが、夕顔にとっては日常の風景であり、夕顔が源氏と同様の感慨をもって庭を眺めているとは考えにくい。I の「もろともに」は源氏が夕顔と一体感を共有するには、源氏には非日常である夕顔の日常を理解することが必要条件であることを示し、二人の一体感が一時的なものに終わる可能性を示唆している。

II は源氏と玉鬘と一緒に臥している場面である。源氏と玉鬘は養父と養女(周囲の女房たちは実の親子とと思っている)という関係でありながら、心理的には互いに恋愛対象としての意識

が働いている。しかし、源氏は「かかるとくひあらむや」と玉鬘を意識しながらも、人目を気にしてそれ以上の行為には出ない。こういった危うい関係の中でⅡの「もろともに」は、源氏と玉鬘の一体感が最も高まった状況で効果的に用いられているが、これ以上の恋愛関係に発展することはない二人の運命を予期しているとも言える。

このように、地の文で源氏が夕顔や玉鬘と「もろともに」で表わされる場合、二人の対性が頂点に達した、読者からすると絵になるような象徴的な場面で用いられている。これに対し、紫の上は源氏との間に四例（六例であるが、須磨巻と御法巻は地の文というより、源氏の心内文的要素が強いので除外する）の「もろともに」が多用されているにもかかわらず、雖遊び（若紫巻・末摘花巻）・食事（紅葉賀巻）・絵の選定（絵合巻）等、日常的な何気ない出来事に使用されている。これは夕顔や玉鬘と異なり、源氏の日常と紫の上の日常は重なるものであったことがわかる。

なお、源氏と紫の上の「もろともに」については、宮崎莊平氏「たとえば光源氏と紫の上——「もろとも」なる語に執して——」<sup>(8)</sup>で論じられている。宮崎氏は源氏の「もろともに」

の全用例中十一例が紫の上に集中していると指摘され、紫の上が他の女性とは一線を画する存在として描かれていることを述べておられる。

実際、地の文だけでなく、源氏の会話文中でも紫の上に多用されている。源氏が使用した十例の会話文のうち七例（他者と他者を源氏が「もろともに」と表した三例は除く）は次のとおりである。

頭中将 二例（末摘花巻 一例／紅葉賀巻 一例）

紫の上 三例（葵巻 一例／若菜下巻 一例／幻巻 一例）

女三の宮 一例（鈴虫巻 一例）

その他 一例（若菜下 一例）

これを見ると、紫の上が最も多い三例（他に歌が一例ある）である。さらに紫の上に用いられた三例の「もろともに」は、長い期間に点在した使用がなされており、紫の上は幼年期から死後まで一生を通して源氏に「もろともに」で表されている。ここからも源氏が紫の上に、永続的な二人の結びつきを望んでいることは明らかである。では、紫の上への対願望とは如何なるものであったのだろうか。

### 三、少女時代の紫の上

「もろともに」という表現は、主従関係であれば主から従へ  
と用いられることが多い。会話文における「もろともに」は一  
対願望や同化を表す表現であるが、それが強者によってなされ  
た場合、その提案を投げかけられた相手は必ずしも平等な立場  
から返答を返すことはできない。こういった状況下での「もろ  
ともに」の問いかけは、返事の不在が前提である。次にあげた  
のは源氏によって紫の上が最初に「もろともに」で表された例  
である。

今日は、二条院に離れおはして、祭見に出でたまふ。西の  
対に渡りたまひて、惟光に車のこと仰せたり。「女房出で  
たつや」とのたまひて、姫君のいとうつくしげにつくろひ  
たてておはするをうち笑みて見たてまつりたまふ。「君は、  
いざたまへ。もろともに見むよ」とて、御髪の常よりもき  
よらに見ゆるをかき撫でたまひて、(葵・二一・二七)

ここは源氏が紫の上を伴い祭り見物に出かけようとしている  
ところである。祭り見物に自分と共に出かけようという提案は、  
源氏からすると最初から拒否される可能性のない提案であった。

『源氏物語』「もろともに」考

「もろともに」を提案した源氏は、それを受ける紫の上に拒否  
権がなく、紫の上自身もそれを望むという認識である。した  
がって、一対願望を提示された紫の上の返答は「否」であるこ  
とはありえず、しかも肯定的な返答すらも不要のようである。

その理由として、単なる力関係以外に、源氏がすでに紫の上  
と自身の間に精神的な同化が成立しているという思い込みの存  
在が指摘できる。本来、会話文中における「もろともに」の提  
案は、それを使用する話者が受容者(多くの場合、会話文の聞  
き手)と自身の関係が一对になることを志向する願望から生ま  
れる。この場合の「もろともに」は話者の願望にすぎず、願望  
の提案によって話者は自身の願望が受け入れられるかどうかと  
いう状況に立たされる。しかし、葵巻での源氏の提案には、こ  
ういった自らの願望を相手に問いかける姿勢が見られない。

一方、源氏の「もろともに」を受容する紫の上はどうであろ  
うか。紫の上は源氏に祭り見物に同行することを促されており、  
実際に同行している。結果としては源氏の紫の上への一対願望  
は満たされたと考えられる。もちろん、源氏の「一対願望を満た  
した要因は紫の上が同行したという事実だけではない。紫の上  
は「もろともに」を提示する源氏に対し、明確な意思表示を

行ってはいない。この意思表示をしないことが紫の上との精神的な面での同化を確信している源氏にとって、より確信を強化する働きをした。紫の上にすれば源氏と同行することは「もろともに」を提示されるまでもないことであった。源氏の提案は自らの選択を問うているのではなく、二人の結びつきの安定から生まれた独り言に近いものである。

葵卷の紫の上には、二人の精神的な一対性を確信している源氏に対して、少なくともそれを拒む様子や源氏の一対願望を疑う気持ちはない。紫の上は源氏の一対願望を受け入れるかどうかの選択権はなく、圧倒的な力の差で強制的にそれを受け入れる形ではあるが、この段階では源氏と紫の上の間には精神的な面での同化が存在していることになる。

#### 四、拒否する紫の上

源氏によって少女時代の紫の上で使用されていた「もろともに」は、両者の立場が強者と弱者であることが明確で、なおかつその主従関係に則った用いられ方がされており、一定の均衡を保っていた。ここでは、その関係に変化がみられたことを検討したい。

渡りたまはむことは、「もろともに」帰りを。心のどかにあらむ」とのみ聞こえたまふを、「ここには、しばし、心やすくはべらむ。まづ、渡りたまひて、人の御心も慰みなむほどにを」と聞こえかしたまふほどに、日ごろ経ぬ。

(若菜下・四・二五七)

この若菜下巻の紫の上は、源氏に初めて「もろともに」で表現された葵卷の用例からおよそ二十五年の月日が経過しており、二条院で病氣療養中の紫の上を源氏が訪ねてくる場面である(宮崎論ではこの用例には言及されていない)。

源氏が成人した紫の上を用いる「もろともに」は、二人の関係性に不具合が生じた時に使用されている。これは逆に言うところには「もろともに」とあえて表現する必要がないということである。では、この若菜下巻において生じた不具合とはなんであろうか。それには女三の宮降嫁を指摘することができる。数ある女性の中で、女三の宮は源氏にとって特別な存在である。これは女三の宮が源氏によって紫の上や頭中将の他に唯一「もろともに」を使用されていることからわかる。

かかる方の御宮みをも、もろともにいそがんものとは思ひ

よらざりしことなり。

(鈴虫・四・二七六)

この「もろともに」は、出家した女三の宮の持仏供養の準備を源氏が女三の宮と共に「行う心境を述べる際に使用されているが、直後に「思ひよらざりしことなり」と打ち消されている事に注目したい。この背景には「自分が存命中に出家するとは予想しなかった女三の宮」という源氏の認識を指摘でき、「もろともに」は起こるはずのないという前提に使用されている。したがって、この鈴虫巻の用例は源氏が女三の宮へ一対願望を提示している用例ではない。

しかし、若菜下巻で源氏が紫の上に「もろともに」を提示したことは、女三の宮の降嫁といった単純な問題ではない。源氏が女三の宮と柏木の不義を知ったことが、源氏の紫の上への心理的な歩み寄りを強くさせたのである。若菜下巻の用例で、源氏は二条院で静養中の紫の上に対して、共に六条院に帰ることを提案している。この源氏の提案の狙いは紫の上との一対性を強化することで、女三の宮を遠ざけることであるが、「もろともに」を提示される紫の上は源氏の思惑を知る由もなく、反対に源氏に対して女三の宮を見舞うことを要求している。そういった両者の心理的な食い違いが若菜下の「もろともに」の周

辺では露わになっている。

源氏は「もろともに」に帰りを。心のどかにあらむ」とあるように、六条院にかえったとしても、その目的は「心のどかにあらむ——(紫の上と) ゆっくりとすこすことにしましょう」にあり、女三の宮にはない。この若菜下巻の源氏の「もろともに」は紫の上への単純な一対願望の提示ではなく、女三の宮の密通を巡る心理的な空虚さを埋めるための使用であったといえる。

ところで、若菜下巻の源氏の「もろともに」の提示が他の例と異なるのは、提示された人物が返答を返しているところである。本来であれば、源氏の提示は返答さえ不要であるほど拒否されることはないが、若菜下巻において紫の上は拒否している。これは『源氏物語』中にみられる「もろともに」の用例のなかでも、極めて異例である。

紫の上が源氏の提案を拒否したのは、源氏の提示自体に問題があったからである。源氏の「もろともに」は前述したように、紫の上との同化を望むというよりは女三の宮との一対性を払拭するために、紫の上との一対性を高めることに目的がある。もちろん紫の上は源氏と女三の宮の複雑な事情を知るわけではな

い。けれども、源氏の「もろともに」を拒否した紫の上側の理由も「人（＝女三の宮）の御心も慰みなむほどにを」という言葉から見て取れるように、源氏の場合とは事情が異なるが女三の宮にある。

紫の上にとって、女三の宮は源氏からの一対願望を受け入れる上で心理的な障壁である。源氏が紫の上へ一対願望をむける際に、女三の宮の存在を問題視していなくとも、一対願望を向けられる紫の上にとっては、正妻である女三の宮を意識せずにはいられない。

若菜下巻において紫の上は源氏の提案を拒否しているが、これは「もろともに」源氏と六条院にかえることを拒否したわけであり、必ずしも源氏と「もろともに」の状態になることを拒否したわけではない。実際に源氏と紫の上は「日ごろ経ぬ」とあるように、二条院で数日を過ごしている。紫の上にとって、二条院で過ごすことは女三の宮のいる六条院に帰ることに比べると源氏の「もろともに」を受け入れやすい環境であることがわかる。紫の上は源氏との一対性を望みながらも、正妻的立場を失ったことへの心理的な葛藤が読みとられる。

## 五、死後の紫の上

次に源氏が紫の上に対して用いた「もろともに」の用例のうち、最も時系列的に最後に位置する用例について考えてみたい。もろともににおきるし菊の朝露もひとり袂にかかる秋かな

(幻・四・五四四)

この歌は、「かつてはいっしょに起き居して長命を祈ったこの菊の朝露も、今年の秋は私一人の袂にかかる涙の露であることよ」(新編全集より)という意味であり、九月九日の重陽の日に延命長寿を祈る被綿の儀に綿をかぶせてある菊を見て詠んだものである。実際に『源氏物語』中に源氏と紫の上が被綿の儀に望んでいる記述はなく、この歌からはじめて紫の上の生前にこういった行事を行っていたことがわかる。

「もろともに」という語を使用した歌が多くの場合そうであるように、この歌も一見は恋人と死別し、残された者の哀傷を詠んだ歌であるように見える。これは言い方を変えれば、源氏の「もろともに」歌は紫の上との死別によって同化の状態が叶わなくなったことを嘆く歌であることになる。

しかし、ここで問題なのは源氏の歌は以前に紫の上と同化を

否定されたことは問題視されず、一方的にかつては一对であったという設定になっていることである。源氏は若菜下巻において、紫の上に一对願望を提示したが、拒否されている。この紫の上の拒否は部分的なもので、源氏との同化自体を拒否したわけではないが、本来なら返答さえ不要であるはずの源氏の「もろともに」の提示に、部分的であっても拒否をしたことは異例といえる。源氏や紫の上が互いに一对性を望んでいたとしても、その願望が双方の知るところでなければ精神的な同化が成立していたとは言えず、一方的な一对願望でしかない。

こういった源氏と生前の紫の上に同化をめぐる問題があったことをふまえると、幻巻の「もろともに」歌の解釈には疑問が生じてくる。従来のように「もろともに」歌が生き残った者の悲しみを詠んでいるといえるのは、存命中の二人の間に精神的な同化が成立しており、その同化が片方の死によって崩れてしまったという前提が必要である。しかし、源氏と紫の上の場合には両者の存命中にすでに精神的な同化に危機があった。

では、同化の状態を保てないまま紫の上と死別した源氏の「もろともに」歌の特質とはなんであろうか。同化の状態が一对対象の死等によって一時的に失われたパターン之歌であれば、

歌の詠み手は現世に取り残された悲しみを詠む。その歌では一对対象の死をもって現世での二人の同化を完了しており、新たな一对願望が提示されることはない。それに対し、源氏の「もろともに」歌では現世に取り残された悲しみに加えて、すでに故人である紫の上に向け、今もなお一对願望を提示している。

源氏は紫の上との同化を二人の存命中に保てなかったことから、一对対象の死後もなお、一对願望を捨てることができなかった。しかし、生きている者の願望は死者に拒否されることはないが、それは同時に受け入れられることもないということでもある。源氏にできることは、二人の精神的な同化に不具合が生じていた過去自体に修正を加えることである。幻巻の源氏の「もろともに」歌では過去の紫の上との思い出を振り返る形式をとっているが、ここで詠まれている「被綿の儀」自体が『源氏物語』中に記述がなく、源氏の記憶にゆだねなくてはならない状況である。源氏の過去への願望による都合のいい脚色が補完されていたとしても不思議ではない。

さらに、幻巻にはもう一例源氏の会話文中で「もろともに」が用いられている。

幼きほどより生ほしたてしありさま、もろともに老いぬる

末の世にうち棄てられて、わが身も人の身も思ひつづけるる悲しさのたへがたきになん。(幻・四・五三五)

この会話文は、時系列的には源氏の「もろともに」歌よりも前に位置し、紫の上を失った悲しみを明石の君に述べているところである。その過程で、源氏は「もろともに」老いぬる末の世」という表現で、自らと生前の紫の上の交わりの深さを表している。

しかし源氏は前述の「もろともに」歌と同様、かつて紫の上から提案を拒否されたことは一切隠蔽している。源氏は明石の君に対して、生前の紫の上との関係をこのように語ることで、紫の上との連帯を確乎たるものであったかのように見せかけようとしているのだ。ここでの源氏の過去の事実の捏造とも思える言動は明石の君を聞き手としているが、明石の君を偽る目的で語られたわけではないだろう。源氏は明石の君を自らの言動の証人とするので、紫の上との同化をめぐる不具合があったという事実をなかつたものと思ひ込もうとしているのである。こういった記憶のすり替えを前提として、源氏の「もろともに」歌に至ったと考えられる。

### 最後に

以上、源氏の使用する「もろともに」について調査を行った結果、源氏の紫の上に向けた「もろともに」の中に、表面的な「共に・一緒に」といった意味だけでは説明できない源氏的心情を読み取ることができた。多数の恋人を持っていた源氏にとって、特定の人物との一対性を考えることは困難に思えるが、源氏の用例は紫の上に集中しており、源氏にとっての紫の上は唯一無二の存在であったと言える。

源氏は紫の上との出会い・女三の宮降嫁・死といった三つの節目に「もろともに」を使用しており、一見は二人の心が一つであることの指標であるかに思える。しかし、実際は「もろともに」が使用されるタイミングは源氏の心理的な空虚さによって左右され、「もろともに」という表現をそのままの意味で解釈することは危険である。

むしろ、源氏が紫の上に対して「もろともに」を使用しない時期に二人の心理的な一対性はあった。源氏が出会った頃の少女の紫の上に「もろともに」によって二人の一対性を確認して以降、若菜下巻までは使用されていない。若菜下巻で源氏は女

三の宮を要因とした心理的空虚感から改めて紫の上との一対性を願うが、反対に紫の上側の女三の宮への心理的葛藤を露呈し、二人の關係に生じた不具合を確認する結果となった。

この否定された「もろともに」は紫の上の死後にまで影響を及ぼし、残された源氏は「もろともに」を事実の歪曲の手段として使用し、最終的に幻卷の「もろともに」歌からみてとれるように、源氏は紫の上との虚構の一对を構築した。幻卷の「もろともに」歌単体では知りえなかった源氏の心理的な背景も、源氏と紫の上の「もろともに」に注目することによってはじめて見えてきた。『源氏物語』中の「もろともに」は、源氏と紫の上の複雑な人間關係を知る貴重な手がかりだったのである。

〈注〉

- (1) 久保田淳・馬場あき子『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・平成11年）
- (2) 吉海直人『百人一首』行尊歌「もろともに」考『解釈』（平成20年4月）
- (3) 女流日記の「もろともに」という表現に関して、次のような研究論文がある。

・宮崎荘平氏「讃岐典侍日記についての補遺」『日本文学始』『源氏物語』「もろともに」考

源から現代へ』（笠間書院・昭和53年9月）

・鈴木裕子氏『蜻蛉日記』私記——上巻における「もろともに」ということ——『駒沢短大国文』（平成6年3月）

・鈴木裕子氏『蜻蛉日記』私記——中・下巻における「もろともに」ということ——『駒沢短大国文』（平成7年3月）

・宮崎荘平氏『蜻蛉日記』における一体感と喪失感——再び「もろともに」なる語に執して——『王朝日記の新研究』（笠間書院・平成7年10月）

・塗木京子氏『道綱の母の心象——「もろともに」の意識をめぐって——』『岡大國文論稿』（平成12年3月）

(4) (5) 注(3)を参照のこと。

(6) 『蜻蛉日記』の「もろともに」の用例（全二十五例）の内訳は次のとおりである。

上巻の九例の「もろともに」のうち七例が作者と夫（兼家）の間に用いられている。

上巻 地の文五例／会話文四例 中巻 地の文五例／会話文三例

下巻 地の文四例／会話文四例

(7) 『宇津保物語』の「もろともに」は全六十七例。

(8) 『蜻蛉日記』中でも会話文では兼家から作者への使用に限定

されている。

(9) なお、「御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり」という表現については古くから注釈書にとられている他、絵圖化されるなど注目されている。また近年では濱田美穂氏が「光源氏と玉鬘の關係——「もろともに」の表現から——」という題目で研究発表(第三七回解釈学会全国大会・平成17年8月23日・於常葉学園大学)されている。

(10) 宮崎莊平氏「たとえば光源氏と紫の上——「もろとも」なる語に執して——」『日本文学』(昭和53年12月)。宮崎氏は「紫の上逝去後の源氏の追慕のくだりであるが、「千年をもち

ともに〈以下略〉」と源氏によって哀惜されていること、「もろともに老いぬる〈以下略〉」と喪失感・孤独感をもって追慕されていること、これらをとおして知られる光源氏と紫の上のかかわりの深さ、源氏にとっての紫の上の存在の重みは、もはや贅言を要しないように思う。そして、源氏の紫の上に寄せる哀惜・追慕の念は、「もろともにおきぬし〈以下略〉」の詠にきわまっているといつてよいだろう。「云々と述べられてはいる。本論ではその裏に源氏の虚構・願望を讀んでみた次第である。」

(本学大学院)